



道悦の自準亭があった場所は、たぶん、この辺りかと…

# 自準亭の本間道悦

(潮来市・四丁目)

まず、今回のタイトルで、本間道悦(ほんまどうえつ)とは何者?と思われた方が多いのではないだろうか。

俳人、松尾芭蕉の事を少しかじったことのある方だったら、「鹿島紀行(鹿島詣)」で芭蕉を自宅に宿泊させた潮来のお医者さん」と言えばお分かりかと思う。

「鹿島紀行」というと、一般的には、根本寺の仏頂和尚との親交のほうがクローズアップされている。しかし、芭蕉は、仏頂との月見の後に潮来の自準亭(道悦宅)に滞在し、「鹿島紀行」を著したと言われているので、道悦も大きく関わっているのだ。

自準亭は、天王町河岸近くにあったとされ、現在の四丁目、天王様の御飯宮の近くで

はないかと思われる。仏頂のほうに有名なので、影の薄い道悦であるが、実は俳諧が趣味で、俳号を「松江」と称す、文系のお医者さんだった。

芭蕉、仏頂、道悦は、どうやって知り合ったのか;調べてみると、この三人は江戸で出会っていたようだ。

延宝八年(一六八〇年)、芭蕉は俳諧師として、ようやく生活できるようになり、門弟の世話で深川に住んでいた。

その頃、仏頂は、鹿島神宮側に邪魔扱いにされて移転させられそうになっていた根本寺を守るために、幕府へ寺領問題を訴願。深川の臨川庵へ居を移して、六年に亘る裁判を続行していた。

道悦は、(少し潮るが)近江国戸田家に武士として仕えたが、九州天草の乱で左脚を受傷。武士から医者へ転身し、尾張で医学を学んだ後に江戸に来て、日本橋の青物町で医家を開業していた。

その時、芭蕉は三十七歳、仏頂は三十九歳、道悦は五十八歳だった。

仏頂と同じ地域に住んでいた芭蕉は、彼から弾の精神(後に出てくる俳名の「桃青」は、青きが最も良しとする)という弾の言葉で、仏頂が名付けたと言われている)を学び、道悦とは患者としてお世話になっていた。

たらしい。道悦自身も、もともと俳句好きだったこともあり、三人の交流があったのではないかと考えられている。

二年後、道悦は、江戸から潮来に転居して「自準亭(じゅんてい)※自準とは道悦の別名」と名づけた診療所を開いた。そして、貞享四年(一六八七年)の八月十五日、芭蕉が門人の曾良と宗波を伴って、鹿島の山の月見のために仏頂を訪ね「鹿島紀行」が生まれた。

潮来の長勝寺の境内には道悦と芭蕉の連句の句碑がある。

❖ (扁路自準に宿ス)と題し) 疇(ねぐら)せよわら干す宿の友すずめ 松江

❖ あきをこめたるくねの指杉(さしすぎ) 桃青

❖ 月見んと汐ひきのぼる船とめて ソラ

❖

❖ 連句で道悦は、芭蕉を自準亭に迎えて「蘆を干すようなあばら家だが、ゆっくりとしていつてくたさい。そして昔の友すずめのように語り明かしましょう」という句を詠み、それに対して芭蕉(桃青)は「秋をこめたる、そして垣の細い苗杉までも、私たちがお迎えくたさい、有難いことです」とお礼の返句を詠んでいる。

参考文献/「ふるさと潮来第 輯、三輯、五輯」潮来町郷土史研究会/「潮来と鹿嶋・香取」高塚雅村著/「史料で探る茨城の歴史」(山川出版社)/「茨城県史」(天竺社)「おらがたいよう村」桑田二郎著(天竺社)商工会地域特産品開発推進実行委員会 他

## 街で見つけた アタタの近所にも居るかも! 無口な人気者

最終回:「早く人間になりたい…(?)」と言わんばかりのアヤメさん(潮来)



「あのアヤメ…人間なみにデカくない?」最初にそう言ったのは、ワタクシの友人でした。潮来に観光で訪れた彼女のために、一緒に遊覧船に乗ろうと受付したときに発見した看板です。地元の人間でありながら、そして毎日通勤で通る道沿いにあるのにもかかわらず、ワタクシはこの巨大アヤメに気が付きませんでした。このアヤメは、看板の人間と同じ大きさなので、「あらっアヤメさん乗ってたのね…」という印象。乗客の中のひとりとして、全然違和感はありません。馴染んでいます。体をくねらせて動きのあるポーズを取っているアヤメさんは、無表情な娘船頭さんや乗客に比べて、何だか人間っぽいです。今日も体をくねらせ、観光客を遊覧船へ誘うアヤメさんです。

## 本 新しい世界との出会い 流星の絆

東野圭吾著 講談社 1700円

冒頭からいきなり両親が惨殺されるというシーンが出てくるので、ちょっとショッキングです。残された3人の兄と弟と妹の、犯人に対する燃えるような復讐心が軸になって物語が展開していきます。そしてついに犯人らしき人物が…。ミステリーの好きな人はもちろんそうでない人にも、おすすめの一冊です。著書らしい緻密な筋立てで息もつかずに一気に読めます。最後のアツと驚く結末に、乞うご期待!



渡辺 恵子(麻生高校図書館司書)

### ◆編集デスクからのお知らせ◆

ニューステーション潮来のホームページの企画変更に伴い、「わたしのまち」の紙面で連載されていた「歴史探訪・鹿行伝説ミステリー」、「無口な人気者」、「本・新しい世界との出会い」は、今号をもちまして一旦終了させていただきます。短い間でしたが、このページのコーナーをご愛読頂き有難うございました。